



2022 年

10 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 10 月 2 日 : ヨハネ福音書 9 : 1 - 12 .

『 その人はどこへ 』

・ 10 月 9 日 : ルカ福音書 10 : 1 - 12 .

『 人知の領域から 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

その日の出来事もやはり安息日に起きたことでした。父なる神が無休で働いておられることを引き合いに出しつつ、イエスもその手足となって働くことを公言します。この「無休の労働」こそ、常にこの世との間に軋轢を生じさせる根本原因でもありました。

さて、そんなある安息日のこと、イエスは神殿のどこかを弟子たちと歩いていると、物乞いをしている人物を見かけます。よく見るとその人は目が不自由な人のようです。

幸いにしてその人の両親がまだ健在だったことから、当時の人の親の寿命を考慮すると、当人はもしかしたら20歳には満たなかったことが考えられます。

イエスの弟子たちの思考力では、人の目が健常ではない理由がどこかに存在していることになるようです。具体的には本人か、または親の罪のせいで視力が備わっていないのだと。ただ、そんな議論をその人の前で始めること自体が、無神経なことでもありました。

イエスは直ちにこの議論にくさびを打ち込みます。「いや、誰のせいでもない」と。いくら過去に原因を探し求めても無駄であると。その人が今は盲目の段階にとどまっているのは、そこから生まれ変わるために待機しているためなのだと。弟子たちには、その言葉の意味が分からないようです。もちろん、癒される当人も、全くそのことは知りません。

ただ、神がどこかで誰かの人生に介入する時とは、常にそうです。カナの婚宴の葡萄酒の如く、恩恵は人知れずもたらされます。その一番近くにいる者だけが、事の重大さに気付かされることになるのです。身体にまつわることならば、もちろんその体の主（ぬし＝本人）が先ず異変に気が付きます。

さて、イエスは傍らにいて、何ら自覚のない「待機中の盲人」の正面に行き、地面に唾を吐き土を捏ねて盲人の目に塗ると同時に指示を出しました。「シロアムの池に行って目を洗って来なさい」と。目の見えない人はなぜか、その光景の一部始終を記憶しました。そして、言われた通りにそこで目を洗うと、その人の目がみえるようになるのです。

さて、彼に指示したイエスと弟子たちはもう、そこにはいません。その代わりに、物乞いの盲人の行動の変化に気が付いた近隣の人々が、今度は

彼の周囲に集まります。彼らは彼の身体に起きたことについて本人に確認を求めさらに、なぜか彼をパリサイ人の所に連れて行きました。彼はそこで再び、自身の身の上に発生した一連の出来事を周囲に説明すると、その克明な描写に不信感を抱いたパリサイ人は、彼の両親の居場所を突き止めて呼び出し、本当に子どもが生来の盲人だったのかを確認します。

一連の出来事は行動制限の厳しい安息日に発生したことでした。人々のその日の行動は最小限にとどめていなければなりません。盲人の一身上の出来事も、規制の対象にされてしまいます。彼は、自分に視力を賜ったのは預言者であると言い、その超法規的な治療行動を賛美しますが、パリサイ人は、行為者（イエス）の行動は、安息日の律法の規則に違反しており許可されず、これを賛美する者も同罪であることを告げます。さらにパリサイ人は異議を唱える者に対し、「お前は全く罪の中に生まれたのに我々に教えようというのか」と非難します。この「罪の中に生まれた盲人」という発想が、イエスの弟子たちのものと一致していたのは言うまでもありません。

幸い、目が見えるようになった人はイエスと再会し、「見て信じる者」の一人として招き入れられます。一方、そこに居合わせたパリサイ人たちは、神の恵みの業が、ただの「違反行為」としてしか目に映らない「見えても信じることのない罪人」として非難されたのでした。

《 人知の領域から 》

「その町の病人を癒し、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい」。これが他の72人の弟子に与えられた指令でした。癒しと宣教、これを一体化して行えと。衣笠病院の創立精神と同じです。ただ、その派遣をイエスはこう表現します。「私があなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り込むようなものだ」と。さらに、「収穫は多いが、働き手が少ない。だから収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主になさい」と。12人の弟子の他に72人が任命されてもまだ足りないということが何を意味しているのか、不明な点も多いのが、この箇所です。ただ、癒しも宣教も人手不足であるというのは。なぜか今も昔も同じです。

さて、様々な困難を乗り越えて彼らが帰還した時の報告もまた出てきます。「悪霊どもまでが、（72人に）服従をする」のだと。聖書では癒しの業が成功したことを意味します。ただ、イエスは何よりも、「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜べ」と言うのです。矢継ぎ早に、不可思議な言葉が連続します。

同じルカ文書の使徒言行録の1章の15節に記されているペトロの前にいた「120人ほどの人々」と、その「名が天に書き記されている」72人の弟子たちの中に同一の人物が多数含まれていた可能性は、古代から指摘されていることです。さらにその中からイスカリオテのユダの代わりにマティアが選ばれ、この世の歴史上の人物の一人として名をのこしたことも充分考えられます。こうした事実からも、イエスの復活が、彼の下から一時離散していた数多くの人々にまで勇気と希望とを与えていたことが読み取れるのです。

彼らは狼の中に送り込まれた小羊のようでありながらも、癒しと宣教とを一度、やり遂げた人々でありました。働き手の補充を祈り求めつつ。こうしてイエスの下で働いたことのある無名の人々が母体となり、イエスの昇天の後に、再び働き手として自主的にペトロの下に集合することになったようです。

著者のルカが彼らの近くにいた人物であったことは言うまでもありません。イエスに直接に任命され、命を受けていた人々とは、働き手でありつつ、自らがイエスの「収穫物」だったのかもしれませんが。熱いうちに打たれた鉄は、さらなる良き働き手と成って行くであります。

ルカは福音書の内容と使徒時代の内容とを分離することなく記述します。その思想は使徒言行録の1章21節と22節に記されたペトロの言葉によって言い表されています。12弟子を含む「ヨハネの洗礼の時から始まって、（主イエスが）私たちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者（たち）のうちの誰か」が、これからも主の復活の証人として加わるべきであると。

遺された数多くの人々が、人知の領域からさらなる知恵を出し合い、主イエスの救いの業を引き継ぎ、人々を癒やし、神の国の宣教に励み、キリストの御業の完成を目指して、よき働きを成して行くであります。